

手仕事の山梨

「やまなし随想」 120929

敗戦後、連合国軍人の家族住宅として接収され、数年間自宅の居住権を失っていた人々がようやく家に戻れたのは独立後ややあつてからのことでした。これらの人々が古巣に帰って一様に驚いたのは、畳の部屋がすべて消え、障子や欄間は、土壁共々板材に変えられていたこと。ネズミサシの豪華な床柱は無残にも白ペンキで塗り固められ、ケヤキ無垢一枚板の床の間は洋タンスに化けておりました。磨き込んでおいた便所に入ってみれば、見たことも無い洋便器が据え付けられ、その使い方が分からない。和式の用法で用事をたそうとするとまるでビルの屋上にまたがっている気分。うまく器の中に納まるかどうかまことに心もとない。まさに「東西文明の衝突」でありました。

こういう衝撃的な出会いが、現在見るような「洋式」文化の急激な受容につながっていったのですが、そのおかげでいわゆる日本的なものが急激にかつ根こそぎ消えてしまいました。

柳宗悦の古典的名著「手

仕事の日本」(岩波文庫)は、北は津軽から南は八重山まで脚で集めた津々浦々の「民芸」を総覧したものです。改めて開いてみるとこの国の民衆の優れた工芸技術と多様性は実に瞠目に値します。そしてこれこそ今世界に注目されている元祖クールジャパンです。

同書が数えた甲斐国の民芸は、水晶細工、印伝、西島・市川大門の和紙、谷村の甲斐絹、それに雨畑硯などです。幸い今も健在です。

日本の民芸と占領軍人家族との衝撃的な遭遇は、床柱に真っ白いペンキを塗りたくるような過激なものでしたが、それはそれで異化した目が見た日本文化でした。しかし、いま、クールジャパンとして全く異なる正の評価を受けているのもまた異化した目のなせる業です。

県立大では、柳宗悦が掲げた山梨の民芸が外国の若い異化した目にどのような印象なのか、国外から学生を招いて現地を歩いてもらいながら、本格的な調査研究を間もなく開始します。そこから地場産業のグローバル化が見えてくることを期待しているからなのです。

(12字×70行)